

学位論文の内容の要旨

学位論文題目 地域医療体制における薬局の機能に関する実証研究

指導教員 櫻井 秀彦

学位申請者 小山内 康徳



医療の高度化・複雑化や少子高齢社会の進展等に伴い、薬局と薬剤師の取り巻く環境は、これまでにない大きな変革期を迎えている。このような状況の中、厚生労働省は、患者本位の医薬分業の実現に向けて、2015年10月に「患者のための薬局ビジョン～「門前」から「かかりつけ」、そして「地域」へ～」を策定した。ここでは薬局再編の全体像を「立地から機能へ」と薬局のあるべき姿の転換を示し、かかりつけ薬局機能や健康サポート機能の一層の強化を目指した取組みを推進することとしている。しかし、このような国が進める薬局の機能強化に係る報告は少なく、特に時間帯に着目した休日・夜間における薬の相談内容の重要度等や、薬局や薬剤師が行う健康相談に焦点を当てるなど、患者側から見た薬局の相談業務を掘り下げた先行研究はない。そこで、本研究では、地域医療体制における相談機能を中心とした薬局の機能的意義を解明するため、性別、地域、年齢及び健康状態等について薬局利用者を対象とした。その上で薬に関する相談と健康の維持・増進に寄与するためのいわゆる健康相談業務等に関する社会調査を行い、個別の相談項目毎の重要性や有用性について検証した。

1 休日・夜間帯における薬局業務の提供体制が整うことに対する安心感

今後の薬局の機能強化の一つとして期待される休日・夜間の対応に関し、各薬局業務に関し、その提供体制が整うことに対する安心感について明らかにするため、北海道内の薬局チェーン3社の利用者を対象に調査を実施した。対象施設数は23であった。

回答者全体と基本属性のうち調剤ニーズおよび相談ニーズの有無について χ^2 検定を行った結果、ともに有意差が見られた「女性」、「60歳未満」、「子どもの同居有」および「札幌市外」の各属性も対象に、地域医療における薬局業務の提供体制に対する安心感をそれぞれ「休日調剤安心感」、「夜間調剤安心感」、「休日相談安心感」及び「夜間相談安心感」とした上で、この4つを説明変数

とし、目的変数を総合安心感として、一般化線型モデルを用いて分析し、薬局利用者の安心感に関する影響を検証し、その結果を Table 1 に示す。各分析対

Table 1 各属性における休日・夜間に調剤や相談体制が整うことの総合安心感に関する一般化線型モデルを用いた分析結果

	総合安心感							
	1 全体 (n=342)				2 子の同居有群 (n=75)			
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2	
	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率
休日調剤	0.040	N.S.	0.047	N.S.	0.153	*	0.166	*
休日相談	0.059	*	0.055	*	0.063	N.S.	0.063	N.S.
夜間調剤	0.086	*	0.084	*	0.045	N.S.	0.022	N.S.
夜間相談	0.013	N.S.	0.010	N.S.	-0.009	N.S.	0.003	N.S.
女性			-0.060	N.S.			0.014	N.S.
60歳未満			-0.009	N.S.			-0.088	N.S.
子どもの同居有			-0.034	N.S.			-	-
札幌市外			0.011	N.S.			0.084	N.S.
調剤ニーズ			0.027	N.S.			0.071	N.S.
相談ニーズ			0.080	*			-0.058	N.S.
3 札幌市外群 (n=274)								
モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		
B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	
休日調剤	0.039	N.S.	0.045	N.S.	0.030	N.S.	0.035	N.S.
休日相談	0.070	*	0.067	*	0.074	*	0.074	*
夜間調剤	0.088	*	0.085	*	0.106	*	0.096	*
夜間相談	0.010	N.S.	0.009	N.S.	0.000	N.S.	0.004	N.S.
女性			-0.046	N.S.			-	-
60歳未満			-0.014	N.S.			-0.070	N.S.
子どもの同居有			-0.014	N.S.			-0.032	N.S.
札幌市外			-	-			-0.039	N.S.
調剤ニーズ			0.034	N.S.			0.034	N.S.
相談ニーズ			0.056	N.S.			0.005	N.S.
5 60歳未満群 (n=252)								
モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		
B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	
休日調剤	0.012	N.S.	0.018	N.S.				
休日相談	0.064	N.S.	0.058	N.S.				
夜間調剤	0.103	*	0.100	*				
夜間相談	0.013	N.S.	0.009	N.S.				
女性			0.038	N.S.				
60歳未満			-	-				
子どもの同居有			-0.032	N.S.				
札幌市外			0.010	N.S.				
調剤ニーズ			0.033	N.S.				
相談ニーズ			0.066	N.S.				

B : 係数, * は検定結果: * $P < 0.05$, N.S. ; not significant

従属変数 : 休日調剤などの各提供体制があることに対する総合的な安心感

モデル1 : 投入した説明変数は、休日調剤などの4つの提供体制のみ

モデル2 : 投入した説明変数は、休日調剤などの各提供体制のほかU検定で有意差が見られた基本属性

象群の回答者数は、全体では 342 人、このうち子どもの同居有群は 75 人、札幌市外群 274 人、女性群 250 人及び 60 歳未満群 252 人であった。

休日・夜間では共に調剤業務が複数の属性で、また、休日では相談業務についても患者に安心感を与えるということが明らかとなった。これは患者のライフスタイルの多様性等により通常開局時間外での調剤の重要性が明確となったと考える。「子どもの同居有」群では、「休日調剤」が他群と異なり、総合安心感により強く影響していた。本群は子の体調の急変等の備え等から、日頃より地域医療情報に関心が高いと推察され、過去の経験等から休日調剤への安心感はとりわけ強いものとする。また、「札幌市外」群と「女性」群の 2 属性では、「休日相談」が安心感に影響を与えるという結果となり、地域や性別の違いにより、相談に対する必要性の認識が他属性と明らかに異なることも示された。

以上のことから、薬局利用者は、夜間や休日であっても薬局が調剤業務に応需する体制が地域に整備されていることが大きな安心感を与えることが、また、特に休日では調剤業務にとどまらず、薬の飲み合わせなどの相談に応じられる体制が備わることで安心感を得ることが明らかとなった。

2 時間帯別の各薬の相談内容項目が総合的な重要度に与える影響

薬局の開局時間と時間外（休日・夜間）における複数の薬の相談内容項目のうちどの項目がより重要であるかを明らかにするため、北海道内の薬局チェーン 3 社の利用者を対象に調査を実施した。対象施設数は 23 であった。

患者が休日・夜間にどのような相談をしたいのかをより明確にするため、10 の相談項目について、患者がどの項目について相談できることが総合的に重要であると思う度合（以下、「総合的重要度」という。）に影響を及ぼすのかについて、相談ニーズの有る群と無い群で 2 群化したそれぞれを分析の対象とし、重回帰分析を行った。その結果を Table 2 に示す。各分析対象群の回答者数は、相談ニーズあり群 56 人および相談ニーズなし群 198 人であった。

休日・夜間帯では、相談ニーズ有群において、総合的重要度に最も強く影響した項目は「服薬の可否」であった。「服薬の可否」は、休日・夜間帯に起こっている症状等に対し、現在手元にある医薬品を使用してよいかなど、その判断について相談するケースも想定され、緊急時には特に優先度の高い相談項目であると考えられる。併せて、総合的重要度には時間帯によらず「緊急時の対処法」が最も強く影響した。更に通常開局時には、休日・夜間帯では影響を及

ばさない「転用可否」の影響が見られた。

相談ニーズ無群においては、総合的重要度に影響を及ぼす項目としては、両時間帯とも共通して「副作用」が強く影響を及ぼしていた。

以上から、相談ニーズ有群では、「緊急時の対処法」及び「服薬の可否」が、そして無群では「副作用」が休日・夜間帯における重要な相談内容項目であるということが明らかとなった。

Table 2 相談ニーズの有無を対象とした休日・夜間及び通常開局時における患者が総合的に重要との相談項目が与える影響

1 相談ニーズあり群 (n = 56)

1) 休日・夜間						
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	t 値	P 値	VIF
飲み合わせ	0.306	0.099	0.326	3.096	0.003	1.455
服薬の可否	0.253	0.066	0.363	3.857	< 0.001	1.164
緊急時の対処法	0.273	0.081	0.338	3.362	0.001	1.327
(切片)	0.714	0.413	-	1.729	0.090	-

調整済 R^2 値 = 0.582

2) 通常開局時						
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	t 値	P 値	VIF
緊急時の対処法	0.245	0.098	0.296	2.516	0.015	1.579
転用可否	0.183	0.061	0.288	2.985	0.004	1.058
飲み合わせ	0.275	0.113	0.273	2.438	0.018	1.424
服薬の可否	0.225	0.093	0.246	2.427	0.019	1.166
(切片)	0.364	0.509	-	0.715	0.487	-

調整済 R^2 値 = 0.517

2 相談ニーズなし群 (n = 198)

1) 休日・夜間						
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	t 値	P 値	VIF
副作用	0.291	0.051	0.332	5.700	< 0.001	2.003
使用期限	0.249	0.055	0.278	4.491	< 0.001	2.261
飲み方	0.205	0.059	0.222	3.448	0.001	2.448
服薬不良時の対処法	0.121	0.058	0.123	2.098	0.037	2.022
(切片)	0.718	0.156	-	4.614	< 0.001	-

調整済 R^2 値 = 0.666

2) 通常開局時						
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	t 値	P 値	VIF
副作用	0.222	0.064	0.262	3.491	0.001	2.484
使用期限	0.178	0.055	0.219	3.233	0.001	2.030
飲み合わせ	0.179	0.065	0.214	2.761	0.006	2.648
服薬不良時の対処法	0.167	0.064	0.188	2.617	0.010	2.268
(切片)	1.155	0.181	-	6.369	< 0.001	-

調整済 R^2 値 = 0.554

重回帰分析：ステップワイズ法. VIF = variance inflation factor (分散拡大係数)

3 薬局での健康相談に関する各項目の有用性

薬局は、今後、薬の相談に留まらず、いわゆる健康相談（健康の維持・増進に寄与するための相談）も重要な機能となることが考えられる。健康相談に関する項目についての有用性や特徴を明らかにすることは、薬局の機能強化のために有意義であるため、全国の2,400名を対象にWeb調査を実施した。

性別および地域の別（都市部と地方部）で2群化したそれぞれについて、総合的な有用性を目的変数とし、健康相談内容14項目を説明変数として重回帰分析を行った（Table 3）。各分析対象群の回答者数は、男性では1,200人、女性は1,200人、都市部1,200人及び地方部1,200人で割付を行った。

健康相談内容のうち男性では14項目中11項目が、また、女性では10項目がそれぞれ有用性と有意な関連があった。従属変数に対する説明の強さを示す標準偏回帰係数（ β ）からは、男性では、「医療機関への受診勧奨」（ $\beta=0.148$ ）が、また、女性では「栄養・食生活」（ $\beta=0.169$ ）が、それぞれ総合的な有用性に与える影響が最も大きい相談内容項目であった。

同様に都市部および地方部ともに、14項目中11項目が、その有用性と有意な関連があり、都市部では、「医療機関への受診勧奨」（ $\beta=0.151$ ）が、また、地方部では「栄養・食生活」（ $\beta=0.190$ ）がそれぞれ総合的な有用性に与える影響が最も大きい相談内容項目であった。

地方部では「医療機関への受診勧奨」と「栄養・食生活に関する相談」以外で、他群に比して、「一般的な病気に関する相談」が有用性に強く影響を及ぼしていた。このことは、今後、薬局で健康相談を充実すると、事前情報の取得などスクリーニング的な意味合いで病院等への受診前薬局も一つの活用法として考えられるほか、薬局に対し、健康づくりや病気の予防、更に、体調管理など、より健康管理の意味合いが強い相談業務を求めていることが示唆された。薬局利用者が自身の健康維持・増進に役立つ健康相談内容項目として、より強く捉えているのは、「医療機関への受診勧奨」と「栄養・食生活に関する相談」であった。

Table 3 薬局における健康相談業務が充実することに対する総合的な有用性

1 性別

男性 (n = 1,200)				女性 (n = 1,200)			
説明変数	B	SE B	β	説明変数	B	SE B	β
病気	0.090	0.024	.100***	病気	0.112	0.027	.123***
健康食品	0.058	0.020	.065**	健康食品	0.053	0.020	.059**
自己検査機器	0.053	0.024	.054*	自己検査機器	0.116	0.026	.119***
予防接種	0.078	0.020	.089***	生活習慣	0.059	0.020	.070**
栄養・食生活	0.137	0.026	.145***	栄養・食生活	0.155	0.028	.169***
受診勧奨	0.141	0.024	.148***	受診勧奨	0.130	0.025	.141***
治療	0.101	0.026	.104***	治療	0.063	0.028	.064*
禁煙	0.042	0.013	.063**	ストレス	0.117	0.023	.131***
ストレス	0.086	0.023	.092***	運動	0.081	0.027	.088**
介護用品	0.089	0.020	.091***	在宅医療	0.042	0.019	.046*
運動	0.132	0.026	.140***				
調整済 R^2 値	0.644			調整済 R^2 値	0.613		
F値	197.897			F値	190.855		

2 地域別

都市部 (n = 1,200)				地方部 (n = 1,200)			
説明変数	B	SE B	β	説明変数	B	SE B	β
病気	0.083	0.026	.090**	病気	0.110	0.025	.123***
健康食品	0.052	0.020	.059**	自己検査機器	0.067	0.025	.069**
自己検査機器	0.100	0.025	.101***	生活習慣	0.047	0.021	.053*
生活習慣	0.053	0.019	.062**	予防接種	0.084	0.019	.095***
栄養・食生活	0.108	0.027	.117***	栄養・食生活	0.177	0.027	.190***
受診勧奨	0.143	0.024	.151***	受診勧奨	0.112	0.025	.121***
認知症	0.058	0.021	.065**	治療	0.068	0.027	.070*
治療	0.088	0.027	.090**	ストレス	0.078	0.023	.085**
ストレス	0.114	0.023	.126***	介護用品	0.082	0.020	.086***
介護用品	0.049	0.019	.051*	運動	0.106	0.026	.112***
運動	0.123	0.027	.133***	在宅医療	0.042	0.020	.045*
調整済 R^2 値	0.632			調整済 R^2 値	0.629		
F値	188.174			F値	185.645		

B: 非標準化係数, SE B: 標準誤差, β : 標準化係数 * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

従属変数: 薬局における健康相談業務が充実することに対する総合的な有用性

方法: ステップワイズ法

4 高齢者を対象とした各健康相談項目の有用性

超高齢社会に伴い高齢者の薬局利用は増加するため、薬局でも今後健康相談の需要が高まることが推察される。高齢者を対象とした薬局での健康相談業務の有用性等を明らかにすることは、今後の薬局のかかりつけ機能の強化に繋が

る可能性があることから、全国の高齢者に対し Web 調査を実施した。

高齢者のうち性別と地域別で 2 群化したそれぞれについて、14 の健康相談内容項目のうち、どの項目がより強く、その相談ができることが患者にとって総合的に自身の健康の維持・増進に役立つと思う度合（有用性）に影響を及ぼすかに関し、総合的な有用性を目的変数とし、健康相談内容 14 項目を説明変数として重回帰分析を行った（Table 4(A), (B)）。各分析対象群の回答者数は、都市在住男性群では 200 人、都市在住女性群は 200 人、地方在住男性群 200 人および地方在住女性群 200 人で割付けた。

有用性に最も強く影響を与える項目として、都市在住の男性では「ストレスへの対処法など、心の健康づくり」（ $\beta=0.297$ ）が、都市在住の女性では「病気（症状）のために必要な身体活動や運動」（ $\beta=0.409$ ）であった。

一方、地方在住の男性では「病気（症状）のために必要な栄養・食生活」（ $\beta=0.342$ ）が、地方在住の女性では「病気（症状）のために必要な栄養・食生活」（ $\beta=0.384$ ）がそれぞれ認められた。都市在住の男性は、他の 3 群に比べて、ストレスへの対処法などを薬局で相談できることが自身の健康管理に役に立つと考えており、今後、薬局を活用する可能性が示唆された。

また、地方在住群では、男女共に「病気（症状）のために必要な栄養・食生活」が有用性に影響を与えており、健康づくりの基本である栄養・食生活を大事に考えていることが明らかとなった。健康に関する相談場所（社会資源）が十分ではない地方部では、栄養等の相談を含め、薬局が極めて重要なインフラになり得ることが伺われた。

一方、都市在住者においては、男女ともに「病気（症状）のために必要な身体活動や運動」が、総合的な有用性に影響を与える個別・具体的な項目であった。

Table 4-(A) 都市部在住高齢者に係る各健康相談項目が総合的有用性に与える影響

男性 (n = 200)					
説明変数	B	SE B	β	VIF	P
ストレスへの対処法などの心の健康づくり	0.306	0.056	0.297	1.803	$P < 0.001^*$
病気(症状)のために必要な身体活動や運動	0.271	0.060	0.273	2.240	$P < 0.001^*$
医療機関への受診勧奨	0.220	0.057	0.216	1.918	$P < 0.001^*$
病気(症状)	0.184	0.058	0.197	2.347	0.002 [*]
調整済 R^2 値			0.678		
女性 (n = 200)					
説明変数	B	SE B	β	VIF	P
病気(症状)のために必要な身体活動や運動	0.375	0.060	0.409	2.236	$P < 0.001^*$
健康食品の適正使用	0.182	0.048	0.200	1.463	$P < 0.001^*$
血圧計など自己検査機器を活用した日常の健康管理	0.194	0.060	0.197	1.972	0.001 [*]
生活習慣	0.118	0.044	0.150	1.665	0.009 [*]
調整済 R^2 値			0.621		

B: 非標準化回帰係数, SE B: 標準誤差, β : 標準化回帰係数, 方法: ステップワイズ法, $*P < 0.05$

Table 4-(B) 地方部在住高齢者に係る各健康相談項目が総合的有用性に与える影響

男性 (n = 200)					
説明変数	B	SE B	β	VIF	P
病気(症状)のために必要な栄養・食生活	0.352	0.057	0.342	1.688	$P < 0.001^*$
病気(症状)のために必要な身体活動や運動	0.309	0.048	0.340	1.537	$P < 0.001^*$
健康食品の適正使用	0.186	0.047	0.210	1.517	$P < 0.001^*$
ガーゼや絆創膏などの衛生材料と介護用品	0.138	0.044	0.150	1.261	0.002 [*]
調整済 R^2 値			0.634		
女性 (n = 200)					
説明変数	B	SE B	β	VIF	P
病気(症状)のために必要な栄養・食生活	0.373	0.066	0.384	2.177	$P < 0.001^*$
病気(症状)	0.264	0.049	0.312	1.601	$P < 0.001^*$
生活習慣	0.188	0.050	0.217	1.584	$P < 0.001^*$
調整済 R^2 値			0.584		

B: 非標準化回帰係数, SE B: 標準誤差, β : 標準化回帰係数, 方法: ステップワイズ法, $*P < 0.05$

5 地域医療体制において期待されるかかりつけ薬局機能の重要度

今後、薬局が地域医療の中で医療提供施設として定着するためには、休日・夜間の対応や相談業務の充実の他、広義の健康相談などが重要であることが明確となった。

しかし、それ以外の「かかりつけ機能」に関しても、住民が個別に重要と考える機能を明らかにし、それを充実・強化する必要がある。今後、薬局がかかりつけ機能を充実させるのに必要な知見を得るため、全国の2,400名を対象にWeb調査を実施した。

有病等を踏まえた健康状態と、かかりつけ薬局として定期利用しているという薬局に対する親和性の2つの視点で分類し、薬局利用者を健康状態が好ましくない群、健康状態が良好な群、薬局親和性高群および薬局親和性低群の4群を対象とした。これらの群について、患者が総合的に重要と思う度合を目的変数とし、かかりつけ機能内容16項目を説明変数として重回帰分析により検証した。その結果をTable 5(A) および(B)を示す。各分析対象群の回答者数は、それぞれ健康良好群では369人、健康状態が好ましくない群は845人、薬局親和性高群434人および薬局親和性低群1,360人であった。

健康状態が好ましくない群では、複数の群で重要度に影響を及ぼした「医療機関への受診勧奨」の他、「専門的な知識を持っている薬剤師がいる薬局」が重要度に強く影響を及ぼしていた。その他、薬局親和性高群では、薬局を定期的に利用することにより薬局への理解が深いことが推察され、かかりつけ機能の中でも、「多剤併用の防止」や「専門的薬剤師の配置」など薬局や薬剤師の専門性に関する機能が重要度に強く影響を与えていた。この結果からも、かかりつけ機能の充実・強化の一つの方向性は、相談業務を最重要事項と捉える必要があることが改めて明らかとなった。薬局利用者は複数の群において、「医療機関の受診勧奨」や「健康の維持・増進に関する相談」などの、利用者と薬局との双方向でやりとりがある機能をより重視していることがわかった。

薬局利用者が期待するかかりつけ機能は、「医療機関への受診勧奨」であり、この項目はいくつもの異なる群において総合的な重要度に影響を及ぼしていた。

以上から、利用者は予防医学的な相談機能を重要と考えており、患者支援の質的向上を図るため、今後、薬局はより一層相談体制等を充実・強化する必要があることが明らかとなった。

Table 5-(A) 健康状態による個別のかかりつけ機能の総合重要度に対する影響

健康状態不良群 (N = 369)			
説明変数	B	SE B	β
副作用に関する継続的な確認	0.118	0.057	0.121*
医療機関への受診勧奨	0.192	0.046	0.186***
専門的薬剤師の配置	0.174	0.039	0.186***
プライバシーへの配慮	0.113	0.052	0.127**
効能効果に関する継続的な確認	0.119	0.043	0.127*
近隣に薬局がある	0.112	0.045	0.116**
薬の飲み忘れに対する支援	0.105	0.029	0.110*
調整済 R^2 値		0.607	
F 値		82.321	
健康状態良好群 (N = 845)			
説明変数	B	SE B	β
薬の飲み合わせ	0.173	0.033	0.200***
バリアフリー構造の導入	0.137	0.024	0.163***
効能効果に関する継続的な確認	0.103	0.031	0.118**
土曜・日曜・祝日の営業(開局)	0.064	0.023	0.076**
副作用に関する継続的な確認	0.102	0.033	0.115**
重複投与の防止	0.091	0.030	0.106**
医療機関への受診勧奨	0.072	0.028	0.077*
24時間相談対応	0.058	0.023	0.068*
近隣に薬局がある	0.072	0.029	0.082*
調整済 R^2 値		0.628	
F 値		159.12	

※ B: 非標準化回帰係数, SE B: 標準誤差, β : 標準化回帰係数
 方法: ステップワイズ法, * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

Table 5-(B) 薬局に対する親和性の高低による個別のかかりつけ機能の
総合重要度に対する影響

薬局に対する親和性高群 (N = 434)			
説明変数	B	SE B	β
効能効果に関する継続的な確認	0.160	0.050	0.166**
多剤併用の防止	0.154	0.046	0.169**
プライバシーへの配慮	0.131	0.040	0.141**
医療機関への受診勧奨	0.155	0.039	0.154***
専門的薬剤師の配置	0.150	0.041	0.165***
近隣に薬局がある	0.080	0.041	0.101*
バリアフリー構造の導入	0.071	0.034	0.082*
調整済 R^2 値	0.646		
F 値	113.883		
薬局に対する親和性低群 (N = 1,360)			
説明変数	B	SE B	β
薬の飲み合わせ	0.130	0.025	0.145***
医療機関への受診勧奨	0.153	0.021	0.162***
副作用に関する継続的な確認	0.119	0.025	0.128**
近隣に薬局がある	0.086	0.022	0.095***
24時間相談対応	0.065	0.017	0.076***
医薬品の備蓄体制の整備	0.078	0.022	0.085***
重複投与の防止	0.091	0.022	0.103***
プライバシーへの配慮	0.058	0.020	0.065**
バリアフリー構造の導入	0.056	0.019	0.063**
土曜・日曜・祝日の営業(開局)	0.046	0.018	0.053**
効能効果に関する継続的な確認	0.061	0.026	0.067*
調整済 R^2 値	0.685		
F 値	269.529		

※ B: 非標準化回帰係数, SE B: 標準誤差, β : 標準化回帰係数
方法: ステップワイズ法, * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$, *** $P < 0.001$

結 語

本研究は、薬局利用者の相談へのニーズの分析を通して、患者のための薬局ビジョンでは明確に示されていない、利用者特性や地域特性などを踏まえた地域の薬局に求められている薬局機能を明らかにした。薬局は、今後、更にかかりつけ機能を充実・強化させるため、従来の調剤とその付帯業務の質を更に向上させることだけに留まるのではなく、患者や家族の心理状況や生活環境等の背景も配慮した上で、患者の安心感を高める休日・夜間の対応や健康維持・増

進に関する相談業務などを複合的かつ多面的に展開していくことが重要であると考える。具体的には、特に利用者特性や地域特性で、薬局に求める機能の優先度が異なること、医療機関よりもアクセスしやすいことが大切であること、および専門家としての的確なアドバイスによって不安を解消すること、以上の3点が重要であることが明確となった。加えて、このような患者視点での業務の積み重ねが地域医療の中で、身近な医療の専門家としての薬局薬剤師という認識が定着することにつながるものと考ええる。また、薬局の健康相談業務においては、患者の治療歴等に加え、その背景事情を把握した上で、主たる薬物療法の指導に加え、栄養・食生活など包括的な薬学的管理に基づいた助言等を行う必要性が明らかになった。したがって、今後、薬局はその活用ニーズを踏まえ、質・量ともに相談業務の拡充を図るとともに、薬剤師一人ひとりが相談業務に関するスキルを向上させることが必要であると考ええる。併せて、今まで以上に利用者の健康維持・増進の視点を取り入れて、健康相談業務の充実・強化を図っていくことが肝要である。